

## 「信じることは新しい時代を切り開く力」

### マルコによる福音書 11章23～24節

聖学院大学 人間福祉学部チャプレン 阿部 洋治

今、イノベーションという言葉が流行っております。イノベーションというのは「革新」とか「新機軸」という意味の言葉です。私たちの社会は今、いろいろの面である種の行き詰まりを経験しております。こうした中で求められていることは、アイデアを活かして、新しい局面を開いて行くことではないでしょうか。そのためには、これまでの習慣や考え方にとらわれることなく、知恵を働かせ機転を利かしてチャレンジすることなのです。もうそこには何の可能性もないと思われる状況であっても、知恵の働かせ方一つでそこに新しい道を開くこともできるのです。

私は、最近、このイノベーションという観点から、非常に興味深い税所篤快という一人の青年のことを知りました。彼は、今25才を迎えておりますが、大学1年生の頃から、日本における教育格差問題で活動を試みておりましたが思うように行かず、悶々とした思いで大学2年生になって、恋人からも捨てられてしまいました。そうした中で貧困層の経済的・社会的基盤の構築のために大きな貢献を果たしたバングラデシュのグラミン銀行の働きを知り、この銀行にインターンシップに出かけることになりました。そこで気がついたことは、街には高級な私立学校があり、質の高い教育をしている先生が集中しているのに、農村部の貧困層の家の子どもたちは教育を受ける機会に恵まれていない。そのために、お金持ちの子どもたちだけがよい教育を受けてよい就職に恵まれお金持ちになるのに、教育を受けることができない農村部の貧しい家の子どもたちは、貧乏生活から抜け出すことができないという現実を目の当たりにしたのです。

そこで彼が思い出したことは、高校時代成績がふるわなかった自分自身の経験でありました。彼は、高校2年の時、ある塾の衛星予備校と出会ったのです。そして、優れた塾講師の授業をビデオで学習することになり、意外なほどに勉強が楽しくなり、その1年後には難関大学に合格することができたのです。この自分の体験を基に、映像を使って、バングラデシュで教育イノベーションを起こすe-Educationプロジェクトを始め、農村部の貧困層に映像で授業を届け、貧しい家の子どもたちにも質の高い授業に触れる機会を提供したのです。その結果、貧しい農村部の子どもたちの中からも、“バングラデシュの東大”と言われるダッカ大学の合格者で出るようになったというのです。それは2011年のことであります。以来、彼は、バングラデシュ以外でも貧困層の教育イノベーションに取り組んで来ました。

ところで、先程お読みいただいた聖書にはイエス・キリストの興味深い言葉が記されております。「はっきり言っておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言い、少しも疑わず、自分の言うとおりになると信じるならば、そのとおりになる」(マルコ 11・23)、と。結論から先に言いますと、

イエスという方も、まさにイノベーションを真剣に模索した御方だということが、この言葉から分かるのではないのでしょうか。ここでいう「山」というのは、私たちの社会に立ちはだかる課題であります。イエス・キリストは、私たちの目の前にある課題も、祈りをもって取り組む時、そこに解決の道を開くことができると教えて下さっておられるのです。

しかも、ここで、イエス・キリストは、私たちの力ではとうてい動かすことのできない「山」を例にして語っておられることも注目すべきことではないでしょうか。彼は、「どうせやっても無駄だ」という思いが私たちの中にいつも起こって来ることをご存じなのです。そこで、彼はいわれたのです。「少しも疑わず、自分の言うとおりになると信じるならば、そのとおりになる」、と。

先程の税所青年がこうしたイノベーションと取り組むことになる兆しは高校時代に遡ります。高校2年生の夏、彼は恩師ともいべき一人の大学教授と出会いました。日本経済新聞が主催する「日経エデュケーションチャレンジ」に参加し、その校長役を務めた一橋大学の米倉誠一郎教授です。税所青年は、この教授からイノベーションについて学んだのです。教授は、高校で変人と思われていたことでどこか後ろめたさを感じていたこの青年に「クレイジーな人間こそが世界を変えるんだ」といってくれました。以来、彼は、この言葉を信条に社会を変えるための活動を模索していたのです。困難にぶつかり、苦しくてもうあきらめなくなった時にも教授は叱咤激励してくれました。「目の前の問題に惑わされずに自分のビジョン、北極星から視線をはずすな」、と。時には、本気になって怒ってくれることもありました。「なぜ先生はそんなに本気で怒ってくれるのか」と聞いたところ、「お前は馬鹿だが実行力がある。馬鹿を育てるのが僕の仕事だから」と言われ、彼はますますこの先生が好きになったと言います。まさに、この教授の言う「馬鹿」とは、誰もしようとしないうこと、誰もがどうせやっても無駄だと思うことについて、「少しも疑わず、自分の言うとおりになると信じる」姿のことではないでしょうか。イノベーションは、現状に馴染んでしまってそこから一歩も先に進み出ようとしないう人々にとっては、まさにクレイジーなことなのです。しかし、古い時代は、そういうクレイジーな人間によって新しくされて行くのです。

2014年4月9日 聖学院大学 全学礼拝